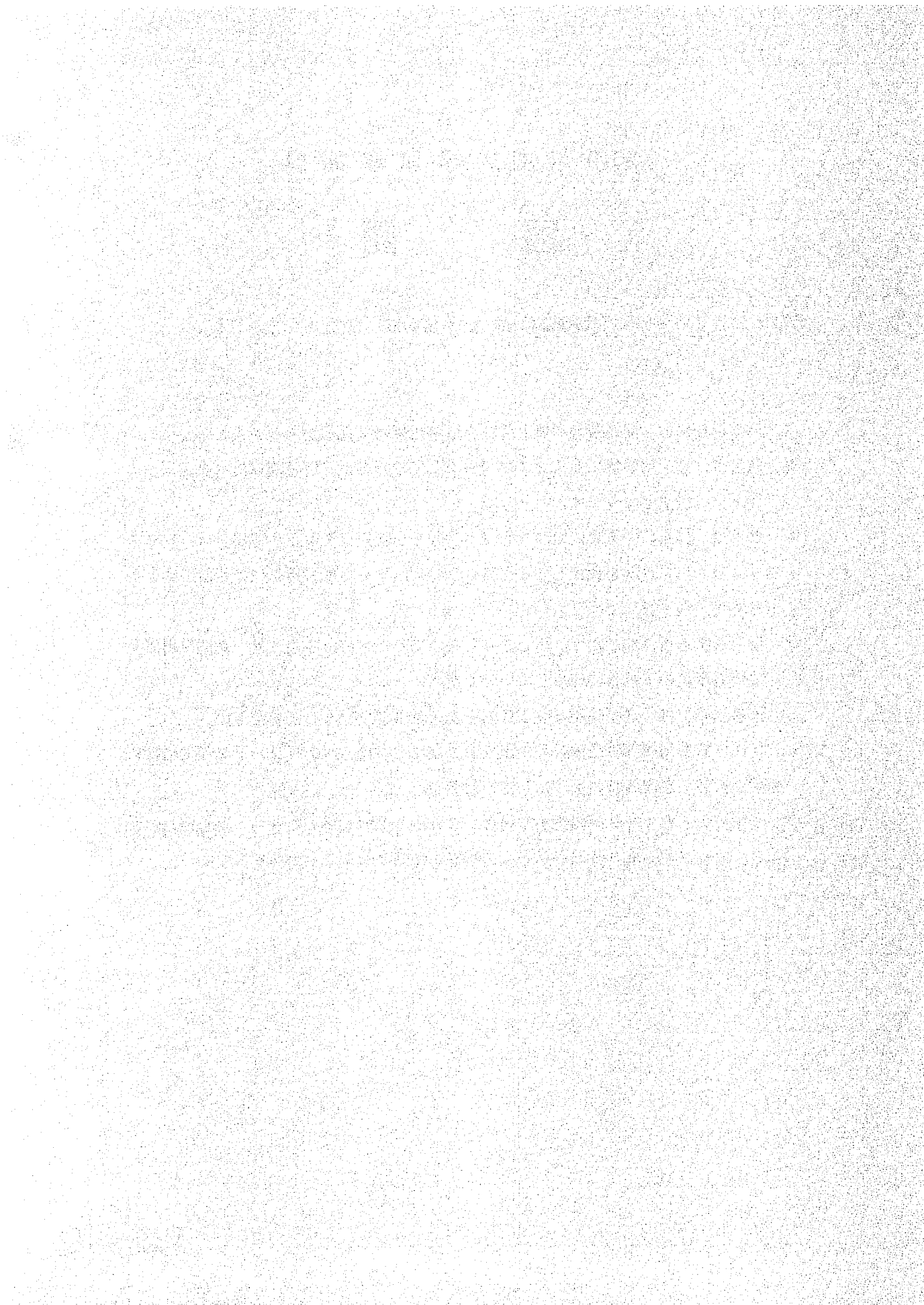


2019 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。



— 一次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

資本主義の柱としての市場経済も、近代科学も、短期の時間軸あるいは均質に流れる抽象的な時間^①が基本となっており、たとえば地震予知や防災といった場面に関しても、古い時代から存在する地域の神社が発するメッセージといったことに関心が向かうことはない。

しかしながら現在求められているのは、自然科学に象徴される近代科学的なアプローチと、いわば「民俗学的・歴史学的アプローチ」とも呼びうるような、歴史性や風土、宗教や自然信仰、文化やコミュニティ等に着目したアプローチの両者を大きな視野で統合していくような、新たな「科学」ないし知のあり方ではないだろうか。

通常の意味の学問的著作ではないが、手塚治虫の『火の鳥』⁽¹⁾は、まさにそうした性格の作品と言えるだろう。『火の鳥』では、邪馬台国の頃や人類の創世といったはるかな過去と、西暦三四〇四年とか、人類が一度滅亡してまた生命の進化が始まって以降といった、はるかな未来を往復しながら、それぞれの時代のある程度独立した物語が進行していく。ただしどの時代の物語にも「火の鳥」が必ず登場する。

この物語の中心的なテーマは、生命あるいは「生と死」、あるいは「死と再生」といった主題だが——特に「未来編」というところで出てくる「宇宙生命^{コスモソーン}」というコンセプトがもつとも核にあると思われる——、私が印象づけられるのは、その時間の射程がきわだつて長いということ、しかも単に時間軸として量的に長いというだけでなく、いわば「時間の深さ」といべき次元、あるいは現象的な時間の根底に流れる「深層の時間」と呼ぶべきものを扱っている点だ(「宇宙生命」もこれに関わっている)。そして先ほど述べたように、遠い過去や土着的なものへの関心、いいかえると民俗学的・歴史学的な関心といったものと、未来や科学や宇宙への近代科学的な関心——この両者はある意味でかなり異質なものだと思われるが、『火の鳥』においてはその両方が融合しているという点である。

ところで、従来の科学の枠を超えるこうした新たな方向は、別の側面から見れば、普遍的な法則のみならず、特定の場所や空

間の個性や多様性に関心を向けた「ローカル」な科学あるいは知という性格を同時にもつことになるだろう。この場合、個性や多様性に関心を向けるといっても、それは単にそれぞれの場所や対象の特徴を網羅的に記述するということだけにとどまるのではない。むしろ、なぜそのような個性や多様性が生まれたかという、その背景までを含めた全体的な構造を把握し理解するというのが、ここでの「ローカルな科学／多様性の科学」の趣旨だ。

この点に関して、「文化の多様性とは何か」というテーマについて生物人類学者の海部陽介は次のような興味深い議論を行っている。

「私たちの文化が多様化した起源は、旧石器時代にはじまった、祖先たちのアフリカから世界への拡散の歴史の中にある。このとき、各地域の文化が発展する速度と方向性に影響したインシ⁽³⁾には、人々の自由意思というものがあつたが、圧倒的に大きかつたのは、地理と自然環境、そして集団がたどってきたそれまでの歴史であつた。例えばアポリジニの祖先が、五万年も前に人類最初の大航海をやつてのけたのは、彼らが進出した東南アジア沿岸部が、海の文化の発達を刺激するような土地であつたからだ。一方で彼らは、北ユーラシア地域の住人のような立派な服や住居を作らなかつたが、それは作る能力がなかつたからではなく、明らかにその必要がなかつたからである。……このように環境に対する適応として発展していった個々の文化に対し、優劣を考へることの正当性がどれだけあるというのだろう。各地へ散つた祖先たちの集団は、それぞれの土地の環境に見合つた文化を発展させていった。」

このように、地球上の各地域の環境の多様性が（それへの適応の帰結としての）文化の多様性を生んだという視点を述べたうえで、海部はさらに次のような印象深い指摘を行う。

「こう見ると、各地域集団が成し遂げた歴史的偉業は、その地域の人々にしかできないことなどではなく、外的インシに対する私たちの種の行動の柔軟性を反映しているとみなすべきだ。ホモ・サピエンスが世界の様々な環境へ進出していったからこそ、その多様な行動を見ることができるのである。」

一九世紀に「エコロジー」という言葉を作つたドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルは、その定義を「有機体とその環境の

間の諸関係の科学」とした。「関係」に注目する科学という発想は近代科学の中ではトクイともいうべきものだが、上記の海部のような把握は、まさに「エコロジー」的なものである。ここでのポイントは、(主体を取り巻く)「環境の多様性」ということを前提としながら、そこでの主体(ないし生命)がある種の「内発性」をもちつつ、その環境と「関係」ないし相互作用しながら新たな多様性を生み出していくという把握である。

話題を異領域に広げることになるが、こうした発想は、近年生命科学でタイトウしている「エピジェネティクス」と呼ばれる研究分野の生命観とよく似ている。「エピジェネティクス」というのは、従来のように、DNAに記された遺伝暗号によって生物の特性がすべて決定づけられているのではなく、むしろ環境との相互作用によって形成される部分が一定以上存在すると考え、その仕組みを探究する分野だ(「エピジェネティクス」の「エピ」は「エピローグ」と同様に「後」という意味)。

これは先ほどの地球上の「文化の多様性」とは全く異質の話のようにも見えるが、主体あるいは生命が内発性をもちつつ、環境と「関係」し相互作用を行い、そこから様々なレベルでの多様性が生まれるという把握は実に共通のものだ。そしてこうした思考の方向性は、近代科学の基本的な世界観とはかなり異質なベクトルを含んでいることに気づく。

つまり近代科学においては、生命や自然を含む世界は、機械論的に、つまり受動的な存在として理解され、そこでは一義的・普遍的な法則が貫徹し、またそれぞれの要素は独立していて「関係」に注目するという発想は二次的なものだった。結果として、それはいわば「一本道の科学」であり、対象や地域や空間の「多様性」ということへの関心は背景的なものだった。

そして、ここが重要な点だが、そうした近代科学の「一本道」としての性格そのものが、資本主義(＝市場経済プラス拡大・成長)という経済社会システムのありようと不可分のものだったのではないだろうか。

資本主義は、市場化・工業化・情報化といった各段階を通じて、いわば「一つの坂道」を登りつづけ、強力な推進力とともに世界を「一つの方向」に動かし、均質化し、序列化していく。ここでは「時間軸」が優位となり、地球上のすべての地域はその座標軸の中で、進んでいる／遅れているという(6)な物差しで位置づけられることになる。

したがって、資本主義のそうした(7)方向が様々な矛盾とともに限界に達し、ここで述べてきたような「ポスト資本主

義」の社会構想が求められていることと、生命の内発性や「関係性」、多様性・個別性に関心を向ける新たな科学のあり方が様々な領域で、同時多発的^⑧にタイトウしていることは、パラレルな現象なのである。

ところで、先ほどの「文化の多様性」の議論の初めで、それぞれの地域の個別性や多様性に目を向けつつ、同時に「なぜそのような個性や多様性が生まれたかという、その背景までを含めた全体的な構造を把握し理解する」という点を述べた。これは、私たちが通常使っている「ローカル／グローバル／ユニバーサル」という言葉をどのように理解するかというテーマとつながってくる。

「ローカル」とは、^⑧地域的、個別的^⑧という意味であり、通常はそうした「ローカル」に対して「グローバル」が対置されることが多い。しかしそうしたローカルと本来^⑧タイショウされるのは「ユニバーサル」のはずで、これは奇しくも、^⑧普遍的^⑧と同時に文字通り、^⑧宇宙的^⑧という意味である。

以上を踏まえつつ、「グローバル」とはもともと (globe に由来する) ^⑧地球的^⑧という意味だとすれば、^⑧通常言われているような「グローバル」(ないしグローバリゼーション)とは全く異なる、ある意味でその本来の(あるべき)意味が浮かび上がってくるのではないか。

それは「ローカル」個別的・地域的」と「ユニバーサル」普遍的・宇宙的」の両者を橋渡しするような意味での「グローバル」地球的」であり、すなわちそれは、地球上の各地域の個性や文化の多様性に大きな関心を向けつつ、同時にそうした多様性がいかにして生成、展開したかを、その背景や構造までさかのぼって理解するような思考の枠組みに他ならない。

言い換えると、世界をマクドナルド的に均質化していくような方向が「グローバル」のではなく、むしろ地球上のそれぞれの地域のもつ個性や風土的・文化的多様性に一次的な関心を向けながら、上記のようにそうした多様性が生成する構造そのものを理解し、その全体を俯瞰的に把握していくことが本来の「グローバル」であるはずだ。

このように考えていくと、人間の歴史の中の、^⑧第三の定常化^⑧の時代としてのポスト資本主義の時代に浮かび上がってくる世界観やそこでの「価値」のありようが、おぼろげながら見えてくるだろう。

人間の歴史は大きく「拡大・成長」と「定常化」というサイクルをたどってきたが、定常期への移行の時代においては、それまでとは異質の新たな観念や倫理、価値といったものが生成した。

すなわち、狩猟採集段階における定常化の時代には「心のビッグバン（または意識のビッグバン／文化のビッグバン）」と呼ばれる現象が生じ（約五万年前）、また、農耕文明の定常化の時代には、紀元前五世紀頃に、ヤスパースが「枢軸時代」、科学史家の伊東俊太郎が「精神革命」と呼んだ出来事が生じ、仏教（インド）、儒教や老荘思想（中国）、キリスト教の源流でもある旧約思想（中東）、ギリシャ哲学といった、現在につながる普遍的な思想ないし普遍宗教が、同時多発的に生まれたのである。

そしてまた、そうした生成の背景には、それぞれの段階の生産技術ないしエネルギーの利用形態が高度化し、その結果としてある種の資源・環境制約に直面し、そうした状況において「生存」を確保するための原理として、言い換えれば「物質的生産の外的拡大から内的・文化的発展へ」という方向を積極的に水路づけるものとして、上記のような新たな観念や思想が生まれたと理解される。

けれども現在のような時代においては、キリスト教とイスラムの対立を含めて、普遍宗教同士が互いにそのままの形で共存するのはきわめて困難な状況になっている。

地球倫理が登場する第一のポイントはこの点にある。つまりそれは、先ほど「グローバル」の本来の意味に関して論じたように、普遍宗教／普遍思想を含め、地球上の各地域における思想や宗教、あるいは自然観、世界観等々の多様性に積極的な関心を向け、しかもそうした多様性をただ網羅的に並列するだけでなく、そのような異なる観念や世界観が生成したその背景や環境、風土までを含めて理解しようとする思考の枠組みだ。

枢軸時代の普遍宗教／普遍思想が、それぞれの普遍的な「宇宙（コスモス）」をもっていたという意味で「コスモロジカル」だったとすれば、地球倫理は、思想や観念をそれが生成した背景や風土、環境にさかのぼって把握するという意味で「エコロジカル」と言えるだろう。同時にそれは、個々の普遍宗教をメタレベルから俯瞰しつつつカキヨウする⁽¹⁰⁾という意味で「地球的公共性」と呼びうる側面をもっている。

(10) 広井良典『ポスト資本主義』による

注 手塚治虫……二〇世紀日本の漫画家。 心のビッグバン……アニメズムの萌芽、絵画や装飾品などの芸術作品の出現。

ヤスパース……二〇世紀ドイツの哲学者。

〔問一〕 傍線(3)(4)(5)(8)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(1)「手塚治虫の『火の鳥』は、まさにそうした性格の作品と言える」とあるが、その理由としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 未来と現在と過去が独立した物語として展開しているが、必ず火の鳥が登場して作品の統一性を担保しているから。
- B 宇宙生命という核となるコンセプトが作品を貫いていて、量的に長い射程の時間軸に深さを与えているから。
- C 邪馬台国や人類の創世といった歴史的・神話的領域を生命の滅亡と進化という科学の言葉で表現しているから。
- D ローカルな舞台で展開される物語が個性や多様性の背景まで含めた全体的な構造を理解させようとしているから。
- E 歴史や神話への関心と未来や宇宙への関心が「生と死」や「死と再生」という共通のテーマで統合されているから。

〔問三〕 傍線(2)「文化の多様性」とあるが、それを理解するためのもっとも適当な方法を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 文化の担い手である各地域の人間が環境への適応として獲得した能力はその集団の本質的な特徴となるので、そのローカルな個別性を探し出す。

B 文化の多様性は自然が与えたものとしては把握できないので、適応を促す環境と人間の内発性との相互作用から生み出されることに着目する。

C 人間はそれぞれの環境に見合った文化しか発達させることができないので、文化的遅延の原因を生存の条件となる環境の特性のうちに求める。

D 環境の過酷さとそれに適応するための文化的成熟度は相関するので、その集団がたどってきた歴史を調べてその独自性を浮き彫りにする。

E 自然現象とは性質を異とする文化は普遍的な法則に還元することはできないので、それが生じた場所やその歴史をまねげなく詳細に調査する。

〔問四〕 空欄(6)(7)には同じ語が入る。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 一義的 B 二次的 C 双極的 D 一元的 E 序列的

〔問五〕 傍線(9)「通常言われているような「グローバル」(ないしグローバリゼーション)」として筆者が考えているものの例として適当でないものはどれか、左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 国家や地域や政治体制の垣根を超え、地球規模で平和や環境問題など人類的課題について考える。
- B 金融自由化や情報通信システムの統合が加速し、国家や地域の垣根を超えた経済活動が加速する。
- C 各国政府による規制が弱体化して多国籍資本が地球規模で支配力を強め、貧富の格差が広がる。
- D 情報通信技術の発達が地球規模でのコミュニケーションを促進し、世界語としての英語の必要性が増す。
- E ファストフードやハリウッド映画など発信力の強いアメリカの大衆文化が世界各地の文化を均質化する。

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A 近代科学を推進力とする資本主義の市場経済は、短期の時間軸において拡大と成長を遂げてきたが、その限界が見えてきた今、自然や風土のような長期の時間軸に着目して、拡大の次に訪れる定常期を見据えた思想を紡ぐべきである。
- イ 遠い過去や土着的なものには自然のスピリチュアリティが宿っており、文化の多様性の背景になっているので、科学では説明のつかない伝統や言い伝えなどを軽視せずに受け入れることがエコロジーの実践として重要である。
- ウ それぞれの文化はそれを生み出した環境によって規定されているので、近代科学と資本主義の市場経済を生み出した欧米以外の地域の環境が現代文明によって破壊されないように見守っていく必要がある。
- エ 市場化・工業化・情報化といった段階を踏んで、資本主義は世界を地球規模で席卷し、もはや後戻りはできない状態となったが、ポスト資本主義思想はその構造的欠陥を見抜き、それに代わる革命的なパラダイムを用意する。
- オ 複数の普遍は形容矛盾となるので普遍宗教の共存はそのままの形では難しいが、その生成の背景としての環境の多様性に着目し、主体の内発性と環境の相互作用を理解することで地球倫理的な共存の可能性が開かれる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

ブリコラージュ (bricolage) は、フランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースの著書『野生の思考』で有名になった言葉である。ブリコラージュは、辞書でひくと①素人仕事、大工仕事、②やつつけ仕事、③手間仕事とあるように、「あらゆる種類の手間仕事をして生計を立てること、応急につくりかえたり、修繕したりすること」である。ブリコレ (bricole) という動詞は、古くは、球技や馬術に用いられ、ボールがはねかえるとか馬が障害物をさけて直線からそれるといふような、非本来的な偶発運動を指した。これらをまとめるとブリコラージュとは、ありあわせの道具材料を用いて、その場その場で本来予定されていなかったものを偶然生み出すことをさす。

レヴィ・ストロースは『野生の思考』の中で、かつて野蛮人とか未開民族と呼ばれた非西洋の先住民が動植物や自然に対して示す思考様式を、具体の科学と呼んだ。その特徴がいわゆる近代科学を支える思考と異なることを示すため、彼はブリコラージュに喩^{たと}えた。

ブリコラージュをする人がブリコール (bricoleur) である。彼は、多種多様な仕事をすることができる。しかしながら、エンジニアとはちがって、仕事の一つ一つについてその計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手が下せぬといふようなことはない。彼はそのときそのときの限られた道具と材料の集合で何とかしなくてはならないし、しかも、もちあわせの道具や材料は雑多でまとまりがない。なぜなら「もちあわせ」あるいは「ありあわせ」とは、いかなる計画にも無関係に偶然の結果手元に届いたものだからである。したがって器用人 (ブリコール) の使うものの集合は、ある一つの計画によって定義されるものではない。

ブリコールの用いる資材集合は、単に資材性あるいは道具として役に立つという潜在的有用性によってのみ規定される。ブリコールは、資材性つまり「まだ何かの役に立つ」という潜在的有用性を「もの」の中に見出す^{みいだ}のだが、それは、「もの」(素材)が、明確に限定された用途のためにとっておかれたのではなく、同じようにとおかれた他の「もの」や周囲の環境との

具体的な関係の中で、あらたな役割が発見されるといふことである。そしてあらたな役割が見出されるためには、細かな点に至るまで「もの」の特徴に気づいていることが大切である。それを可能にするのが、プリコロールのあくなき知的探求心である。それが具体の科学、野生の思考の特徴なのである。

ここで、これまでの人類学が見落としがちだったが、注意しなくてはならない点が二つある。第一に、プリコロールは(2)を発揮してはいないこと、第二に、プリコラージュは、人間の営みに限定されているわけではなく、既に生物の進化のなかに見出されていることである。

プリコラージュは、利用する物・資材を点検し、それまでとは異なる有用性を見出し転用することである。それは物や資材がそれまでとは異なる相貌をあらわすよう働きかけることであり、そこには、物や資材との間に意識されざる「駆け引き」が試みられている。駆け引きはプリコロールの意のままになるとは限らない。したがって、自分たちの利益にかなうよう、自分たちの都合のよいように、社会の中の支配的要素を配列し直しあらたな意味をそれらに賦与しようとする主体がプリコロールの本質だといえないのである。

しかし人間の精神における知的探求心によるもののみがプリコラージュではない。そもそも生命の進化とはプリコラージュだと説くのが、フランスの分子生物学者フランソワ・ジャコブである。例えば、陸上の脊椎動物の肺形成は、よほど水たまりに棲息する淡水魚からはじまった。魚は空気を飲み込んだとき食道の壁を通じて酸素を吸収する。その状況下で食道の表面積を拡大することが淘汰に際して優位をもたらすことになった。かくして食道に憩室が現れ肺となるまでに拡大した。「食道の一部から肺を作り出すのは、祖母より譲り受けたカーテンの切れ端からスカートを作るのと非常によく似ている」とジャコブはいう。進化は、何百万年もの間、少しずつこつちを付け加え、あつちを切り取り、そつちを伸ばしというふうには、あらゆる変形と創造の機会を捉えて、その産物を改良してきた。

生物のDNA配列を比較すると、同じ種だけでなく系統的に大きく異なった種にも遺伝情報のかなりの部分に似通った配列が見られる。それはあたかもアデニン(A)、グアニン(G)、シトシン(C)、チミン(T)という塩基の配列とリン酸とデオキ

シリボースからつくられたバックボーンからなるDNAの断片をなおくりかえし使用し、とりかえひきかえしてくつつけたり置き換えたりすることで形成されているかのようである。A、G、C、Tはいつまでも「まだ使える」のであり、その組み合わせで生物は少しずつやりくりしながら、発展していく。進化とは、その時の手持ちの材料でやりくりしてできるかぎりのことをするプリコラージュだったのである。

プリコラージュを人間に特権的な現象と考えてはならない。進化という枠組みで考えると、生態心理学者のジェームズ・ギブソンが提唱したアフォードダンスもプリコラージュとして捉えることができる。アフォードダンスとは、われわれを取り囲んでいるところに潜んでいる意味であり、人間が考え出した意味ではなく、個体を超えて環境に実在している潜在的意味であるといえる。個体はそれを環境に見出していくのであり、動物の個体の群れの生の活動を支える資源になる。しかし環境やそこに存在する対象のアフォードダンスはいつも同じ意味を持つのではない。状況に応じて変化する。下肢切断した人がリハビリのためにプールに入ると、しばらく水の中にいることで、背骨を軸にしてくねくねした横揺れが全身に起こってくる。それは、下脚を失った全身が、水に新しい「身体を移動させる性質」を発見したことを示している。下肢切断の身体は、今までは異なる水の性質と組織化して水の中を移動し始めるのである。

あるいは適当な長さで重さを持った棒状の細長い物質があり、振り回すために用いることができる。しかしこのような物質は打ったり叩いたりするのに用いることができ、さらには遠くの物を近くに引き寄せるのにも用いることができる。野球のバットとしてだけでなく、物質と人が置かれた状況や環境に即して、棍棒こんぼうや槌つち、熊手の一種として応用するのがアフォードダンスといえるなら、それはそのままプリコラージュでもある。

このように、対象の潜在的意味を発見し、その場その場でなんとかやっていこうとするプリコラージュという野生の思考の特徴は、(3)として捉える必要がある。

(出口顯「今日のプリコラージュ」〔奥野克巳・石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』所収〕による)

〔問一〕 傍線(1)「ブリコロール (bricoleur)」がおこなう仕事の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A ある資材の持つ潜在的有用性を、別の資材や周囲の環境との具体的な関係の中であらたに発見する。
- B 物や資材との間で駆け引きを意識的に試みることで、それまでとは異なる相貌をあらわすよう働きかける。
- C もちあわせの道具と材料を用いて、その場その場で本来予定されていなかったものを意図的に生み出す。
- D 定められた計画に即して考案され購入された材料や器具を用いて、多種多様なものを作り出そうとする。
- E 雑多な物や資材を点検して従来とは異なる有用性を見出し、それを自分たちの利益にかなうよう転用する。

〔問二〕 空欄(2)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人間性
- B 生産性
- C 偶然性
- D 主体性
- E 意外性

〔問三〕 空欄(3)に入れるのもっとも適当な語句を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 資材と道具との相互作用
- B 社会の中の支配的要素の置換
- C 環境と個体との関わりを組み替え
- D 変形と創造のたえまない反復
- E 生物の進化の発展的過程

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 野生の思考としてのブリコラージュは、細かな点に至るまで「もの」の特徴をとらえようとする、人間精神におけるあくなき知的探求心に集約される。

イ 生命の進化は陸上の脊椎動物の肺形成が示すように、その時の最適な材料を用意周到に配列・置換するブリコラージュになぞらえることができる。

ウ 生態心理学の概念であるアフォーダンスは、動物がその生活環境の探索によって見出していくさまざまな潜在的意味であり、状況に即して選り出される。

エ 非西洋の先住民が動植物や自然に対して示す思考様式は、近代科学を支える思考とは異なり、対象の潜在的意味を見出すブリコラージュの思考である。

三 次の文章は、『蜻蛉日記』の作者が夫兼家の訪れないことに耐えかね、山寺に籠っている場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

かくなむと見つつ経るほどに、ある日の昼つかた、大門のかたに、馬のいななく声して、人のあまたあるけはひしたり。木の間より見通しやりたれば、ここかしこ、直人あまた見えて、歩み来めり。兵衛佐なめりと思へば、大夫呼びだして、「いままて聞こえさせざりつるかしこまり、とり重ねてとてなむ、まあり来たる」と言ひ入れて、木陰に立ちやすらふさま、京おぼえていとをかしかめり。このごろは、後にと言ひし人も、のぼりたれば、それになほしもあらぬやうにあれば、いたく気色はみ立てり。返りことは、「いとうれしき御名なるを。はやく、こなたに入りたまへ。さきさきの御不浄は、いかでことなかるべく祈りきこえむ」とものしたれば、歩み出でて、高欄におしかかりて、まづ手水などものして入りたり。よろづのことも言ひもてゆくに、「昔、ここは見たまひしは、おぼえさせたまふや」と問へば、「いかがは。いとたしかにおぼえて。いまこそかく疎くてもさぶらへ」など言ふを思ひまはせば、ものも言ひさして、声変はるこちすれば、しばしためらへば、人もいみじと思ひてとみにももの言はず。さて、「御声など変はらせたまふなるは、いとことわりにはあれど、さらにかくおぼさじ。よにかくてやみたまふやうはあらじ」など、ひがさまに思ひなしてにやあらむ、言ふ。「かくまゐらば、よく聞こえあはめよ」などのたまひつる」と言へば、「などか。人のさのたまはずとも、いまにもなむ」など言へば、「さらば、おなじくは、今日出でさせたまへ。やがて御供つかうまつらむ。まづは、この大夫のまれまれ京にものしては、日だにかたおけば、山寺へと急ぐを見たまふるに、いとなむゆゆしきこちしはべる」など言へど、気色もなければ、しばしやすらひて帰りぬ。かくのみ出でわづらひつつ、人もとぶらひ尽きぬれば、またはとふべき人もなしとぞ、心のうちにおぼゆる。

(『蜻蛉日記』による)

注 直人……供人。

兵衛佐……兼家の息子である藤原道隆。道綱の異母兄。

大夫……藤原道綱。兼家と作者の子。

後にと言ひし人……作者の妹で、今作者と共に山寺にいる。

高欄……渡り廊下などに取り付けた手すり。

〔問一〕 傍線(1)(2)の解釈として、もっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 「なほしもあらぬやうにあれば」

- A 並々でない関心があるようなので
- B 普通ではない関係だったようので
- C 尋常ではない様子だったので
- D 良い直衣がなかったようので

(2) 「気色ばみ」

- A 具合が悪い様子で
- B 不安な気持ちで
- C 怒った顔で
- D 気取って

〔問二〕 傍線(3)「いとうれしき御名なるを」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「本当にご無沙汰でしたね」という趣旨の相手を責める言葉。

B 「すばらしい名前をありがとう」という趣旨の感謝の言葉。

C 「素敵なお名前ですね」という趣旨の相手を褒める言葉。

D 「よくいらっしました」という趣旨の挨拶の言葉。

〔問三〕 傍線(4)「ここは」の指すものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 道隆が B 道綱を C 私を D 山寺を E 高欄を

〔問四〕 傍線(5)「変はらせたまふなるは」の文法的な説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 動詞＋使役の助動詞＋謙譲の補助動詞＋断定の助動詞＋助詞
B 動詞＋使役の助動詞＋尊敬の補助動詞＋推量の助動詞＋助詞
C 動詞＋使役の助動詞＋尊敬の補助動詞＋断定の助動詞＋助詞
D 動詞＋尊敬の助動詞＋謙譲の補助動詞＋推量の助動詞＋助詞
E 動詞＋尊敬の助動詞＋尊敬の補助動詞＋断定の助動詞＋助詞
F 動詞＋尊敬の助動詞＋尊敬の補助動詞＋推量の助動詞＋助詞

〔問五〕 傍線(6)「ひがざまに思ひなして」とあるが、誰が何をどのように勘違いしたというのか。その説明としてもっとも適当

なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 作者の声の様子の変わったのが、兼家との別離を決心したためだと、道隆が勘違いした。
B 作者の声の様子の変わったのが、兼家に別れを告げられたためだと、道綱が勘違いした。
C 作者の声の様子の変わったのが、兼家に見放されたと思ったためだと、道隆が勘違いした。
D 道綱の声の様子の変わったのが、両親の別離に心を痛めたためであると、道隆が勘違いした。
E 道隆の声の様子の変わったのが、兼家の代理で別れを告げに来たためだと、作者が勘違いした。

〔問六〕 傍線(7)～(9)の主語として、もつとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 道隆 B 道綱 C 作者 D 兼家 E 作者の妹

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 道隆の訪れは、作者に様々な感慨を与え、下山へと促す効果があった。
イ 道隆の訪れは、作者に動揺を与え、山籠りを続けようという気持ちを強くさせた。
ウ 作者は、もう誰も訪れる人がいないと思ひ、そろそろ下山しようと考えている。
エ 作者は、夫の兼家自身が迎えに来るまでは下山しないと固く心に決めている。
オ 道綱は、京と山寺との行き来に疲れ、母に下山することを強く勧めている。

